

〔解説〕

1) 不適切である。

資産運用におけるリスクの概念は、リターンが期待通りに実現しない度合、リターンの振れ幅、不確実性の度合いのことであり、期待リターンの標準偏差で表されます。リスクは、一般的に「危険」や「損失」という意味で使われ、投資信託などの金融商品の目論見書に基準価額の主な変動要因として「信用リスク」や「流動性リスク」、「為替変動リスク」などが記載されています。このリスクは、「危険性」や「損失の可能性」という意味で使われており、資産運用におけるリスクの概念とは異なります。

2) 不適切である。

資産運用では、リスクはリターンが期待通りに実現しない度合、リターンの振れ幅（不確実性の度合い）を意味し、期待リターンの標準偏差で表します。1年の標準偏差・リスクを ρ とした場合、 n 年間の標準偏差・リスクは \sqrt{n} 倍になります。

$$\begin{array}{ccc} \text{1年間のリスク} & & \text{n年間のリスク} \\ \rho & < & \rho \times \sqrt{n} \end{array}$$

つまり、投資期間（ n ）が長くなれば長くなるほど、リスク（標準偏差）は拡大します。DCプランナーとしては、「投資期間が長くなるとリスクが小さくなる」などの不十分な説明で、誤解を与えることがあってはなりません

n 年間のリスクを1年あたりにすると次のようになります。

$$\frac{\rho \times \sqrt{n}}{n} = \frac{\rho}{\sqrt{n}} = \rho \div \sqrt{n}$$

つまり、投資期間が長くなればなるほど「1年当たりのリスク」は減少していきます。この「投資期間が長くなると1年あたりのリスクが減少する」ことを「投資期間が長くなるとリスクが減少する」と言うと、それは明らかな誤りです。投資期間が長くなれば長くなるほど、期待リターンからの振れ幅であるリスクは拡大し、増えるということです。

3) 適切である。

資産分散や銘柄分散を行うと、組み合わされる資産や銘柄の相関関係（相関係数）の違いによって、同じ期待リターンであってもリスクは異なります。つまり、リスクは資産分散や銘柄分散によって低減できると言えます。ただし、「組み合わせによっては、リスクをゼロとすることも可能です。」と言うことは明らかな誤りです。この解説は数式を用いるべきですが、今回はリスクの概念問題なので、この程度の説明に留めます。別の機会でリスクの計算問題を用意しますので、その際に計算式を用いて説明したいと思います。

4) 不適切である。

いわゆるドル・コスト平均法（定時定額購入法）の説明です。定期的に一定額購入することにより、価格が安い時には多い数量、価格が高い時には少ない数量を購入することになり、結果として購入価格を平準化する購入法です。同額の資金であっても、一時期に購入するとそのタイミングによって価格が高かったり、安かったりします。価格変動のタイミングを見定めることは不可能です。よってこの方法は、タイミングを計っている間に購入の機会を逸したり、高く振れたときに投資金額全額で購入したりする危険性を排除する効果があります。しかし、資産運用の成果・リターンを高めたり、リスクを低減させたりする効果はありません。この点を理解しておきましょう。

[戻る](#)